



かたはSP学生Office

教師を目指す学生による「学生文化」「学校文化」の創造と
新たな「学生と学校のWin-Winの関係」の構築

かたはSP通信

と
ひ
と
ツムぐ学生

第47号

2017年8月23日

編集 竹内稔博

(東浦中学校主幹教諭)

夏休みわくわく算数・数学教室特集号 No.26

～そうだ、夏は、東浦へ行こう！ 東浦の子どもたちのために、
そしてSPさん自身の教師力向上のために～

特別支援学級児童への「支援」と、保護者の願い



3年生の男の子でG君という子がいます。このわくわく算数教室には、3年間連続で来ています。毎年、わくわく算数教室をすごく楽しみにしています。彼は、特別支援学級に在籍しています。わくわく算数教室は、特別支援学級の児童も、受け入れます。個を大切にしていますから、最大限の配慮をします。担当するSPさんも、積極的に配慮に心がけます。事前に担当が伝えられるので、昇降口まで迎えに行ったり、送るときも昇降口まで付き

添ったり、G君のお母さんに様子を話して見送ったり、というところまでやります。これって、普段なら、そして普通なら担任がやることです。担任レベルの配慮です。それをSPさんが、やっているのです。SPさんが自然にやってしまうのです。ここに、この事業の「すごさ」があります。保護者と話をする、保護者の要望を聞く、保護者にやったことの説明をする、様子の伝達をする。こういうことも、身をもって学びます。他のボランティアではないことです。

G君の保護者の方も、SPさんには絶大な信頼を寄せています。担任と同じくらいの信頼をよせてくれています。SPさんも意気を感じて全力で関わってくれます。ここに教育の神髄があります。

(写真上、SPさんが手にもっているメモ用紙は、保護者からの連絡の紙です。担当するSPさん



に、ここを教えてほしい、こんなことに気を配ってほしい、という依頼が書かれています。)つまり、わくわく算数は、保護者のニーズもきちんと受け止めて教育活動を行うことができている、SPさんがそれをやっている、ということです。

G君へのSPさんの最高の笑顔。ここまで関心を寄せてくれる大人は、それほど多くないことでしょう。価値ある教育活動をしてあげていることが、この笑顔からも分かります。

